

障がいをもった人が就職するときは、就職がゴールではなくスタートだと考える。

本人ができる能力を高め、足りない所はクリアできるような支援をしたい。環境の変化が本人に大きな影響を与える場合がある。

不安や悩みが増えるので、サポートするサービスが必要だと感じる。ジョブコーチの支援でサポートしてもらうことが多いが他のサービスについてもまだまだ知られていないことが多い。

就労意欲を維持するためには、余暇は重要だが余暇を提供するためのサービス内容が不足しているし、行動援護等を利用してもらいたい佐賀はまだ不足しており今後の増加に期待する。サービス内容を本人が選択し適したものを提供できるようにならなければならないと思う。

相談員の立場からについて

佐賀県知的障害者福祉協会 武雄市相談支援センター相談支援員
くろかみ学園 相談支援係長 福田亜紀子 氏

人生には、乳幼児期、学齢期、青年期、高齢期などのステージがある。乳幼児期では、保健師の関わりが大きく障がいを保護者が受容できるようにするまでを専門の療育の重要性を説き、早期療育につなげられるように支援している。学齢期・青年期では、学校の先生や主治医との連携が主になる。

療育を継続する、長期休暇中に預かる、家庭を支援するなど。高校卒業前には、本人にあった日中活動の場を選択してもらいながら、自立に向けて福祉的に医療、親と話を進めたことをもとに本人と離していく。

また、本人の希望を探ることが就労や余暇の充実にとって大切。自立が進まないと保護者と一緒でないと外出できないことが問題になり、親亡き後のことを踏まえて成人後は自立生活に向けた生活に移行できるように目指したい。

障がいの特性もあり、子どもは慣れるのに時間がかかることを想定して、幼少期より親亡き後の生活を考えてほしいと伝えている。そのために、福祉サービスを使いながら、自立への準備を始めてほしい。高齢期では、介護が兄姉に移る時期。本人のことを兄姉に託したいと思っているが、それぞれ生活があり本人の世話ができないことがあるために地域での生活の基盤を作ることが大切。

福祉サービスとして児童発達支援、放課後、休日や社会との交流促進にむけたサービスがある。保健所とも連携し多面的な支援をしている。各ライフステージの間が途切れないように、新しい支援者と環境を慎重につなぐ計画相談を作る必要がある。いろいろなサービスと組み合わせ人生設計を作っていくことをいろんな人と連携して作ることにしているが、地域全体で考えていけるように心がけ、本人の意思決定を大切に、家族を支え、地域で安心して本人が望む支援をしたいと思う。

最初は、少人数での相談体制だったが、男性の相談員も加わり育成会や身体障害者団体と連携し、障がいがある人や身近な人の声から学びながら知識と経験を増やし信頼してもらえるような機関を目指したい。

本人分科会

テーマ「仲間との語り合い」

～自己紹介・仕事のこと・一番楽しいこと・これからの夢～

○発表者1 鹿島福祉作業所 尾崎ちひろさん

鹿島福祉作業所では、農作業や内職、電線のかわはぎなどいろいろな仕事をしている。月に一回、歌ったり踊ったりする音楽療法を受けている。作業所では、花見や研修旅行、キャンプなどの楽しいイベントが行われている。

今は、好きなアイドルグループのグッズを集めることが一番の楽しみである。これからも仲間をたくさん作って、作業をがんばっていきたいと思っている。

○発表者2 えがおの会（まごころ授産所） 入江奈瑠美さん

授産所で働き始めて3年目になる。弁当の盛り付けや箱の組み立てなどの仕事を周りの職員の方にやさしく教えてもらいながら、楽しく働いている。休日は犬の散歩をしたり、音楽を聞いたりして過ごしている。

「えがおの会」に入り、今年から役員を2年間することになったのでがんばりたい。会ではボランティアや勉強会を行い、楽しく活動している。

